

アジア

24

宗教、民族紛争— 安易なタブーへの挑戦

ある日彼はマレーシア独自の社会制度である「マレー人（ブミプトラ）優遇政策」に言及し、「この制度はマレー人の能力を過小評価するもので、マレー人の自立には貢献しない」という趣旨の講話をしていた。その途中でモスク側から発言の中止と、翌週からの講話お断りを申し渡された。

マレーシアでは通貨危機によつて株価は急落、このあおりでマレー民族資本家の育成を狙いとした政府の産業政策は大きな打撃を受けていた。大手マレー企業多くは破綻の危機に見舞われていた。彼は「優遇政策にいつまでも依存してはマレーシアの産業・経済は強くないと説くつもりだったのに」と、突然の講話中止命令に納得できない様子だった。

マレーシアには多くのタブーがある。最大のタブーは憲法に明確に規定してある。「マレー人の特別な地位」

もう9年ほど前だろうか。マレーシアで友人が経験した話を思い出した。彼は英国留学を経験したマレー人青年で敬虔なイスラム教徒。仕事のかたわら、クアラルンプールのあるモスクで金曜礼拝時に講話をする役割を買って出ている。イスラム教と近代価値観との両立を常に説くのが彼の講話内容だった。

習慣にしたがう人々」と憲法で位置づけられている。彼のマレー人優遇政策をめぐる発言はまさに憲法の敏感条項に該当し、モスク側が発言をさげすんだのは国の体制を考えれば当然なことではある。

当時は華人系の商工会議所団体が記者会見席上で、堂々とマレー人優遇政策への不満を表明。この不満に対して政治権力を握るマレー人社会が反発中には激しい言葉で華人社会を威嚇する政治家もいた。

クアラルンプールに駐在していた小生はこの友人の話聞き、憲法で敏感条項を規定しなければならぬマレーシアの複雑な国のあり方を改めて感じたものだった。

こんなことを思い出したのはモハンマドの風刺漫画問題をはじめとする宗教や人種・文化に根ざす深刻な摩擦が多く発生しているからである。

アフガニスタンでは改宗したイスラム教徒の問題が世界の注目を集め、インドネシアではイスラム強硬派がキリスト教の教会の閉鎖を要求。マレーシアの最近の調査ではマレー人の50%が華人、インド系人を「信用できない」と考えているという結果が明らか

になった。この調査では華人の多くがマレー人を「怠惰」とし、マレー人とインド系人の多数が華人を「欲張り」、マレー人と華人の多くはインド系人を「信用できない」とみていることも明らかになり、多民族国家の運営の難しさを浮き彫りにした。

マレーシア、インドネシアで知識人に多民族国家の問題を取材した際、「ガラスの家」という言葉をよく聞いた。微妙なバランスに立つ国の構造を、石でも投げられたらひとたまりもない「ガラスの家」にたとえたものだ。また、国家や文化を形作る芯も敏感に振動するガラスの板とたとえても良い。この芯に刺激が加われば、国家や地域全体が揺れてしまう。

外野席からは非合理にみえるイスラム国家やアジアの多民族・宗教国家のタブーには「ガラスの家」を守る機能を果たしているものが多い。実は世界全体もいろいろなあつれきを抱えるガラスの家でもある。「ガラスの家に住む者はガラスの家に石を投げるな」。宗教、民族間のあつれきを招く安易な行為をみるたびに、この格言が思い浮かぶ。

日経中国（香港）社 奥村幸広